

# ヒロシマ音楽譜

作品が紡ぐ復興

③

ヒロシマに関わる歌、原水爆禁止運動が一举にと聞いてこの曲を思い出高まった。東京の高校です人は今、どのくらい社会科を教えていた木下るだろうか。木下航二(1925~99年)作曲の「原集を見て浅田石二に作詞爆を許すまじ」。往時のを依頼し、曲が完成した。知名度が失われたとはい歌は同じ年に東京で初

## 木下航二

え、やはり最もよく知られた曲といえは今でもこの歌になるのかもしれない。広島だけではなく日本、それどころか海外にも広く知れ渡った歌、といえはなおさらだ。

厳密に言えば、この歌はヒロシマだけを想定して書かれたものではない。54年3月、ヒキ二環礁での米水爆実験でマグロ漁船、第五福竜丸が被曝したのを機に、日本の

# 「許すまじ」世界が合唱

演され、8月6日には広島でも披露されている。だが、この歌に対する人々の熱狂が広島市民に伝わるのは、翌55年の8月6日から3日間にわたって開かれた第1回原水爆禁止世界大会において、14万国から25

00人余りが参加した大会の最終日、木下自身の指揮で全体合唱されたのである。そのころ、歌はすでに海を越えていた。ワルシヤワで開かれていた世界青年学生平和友好祭において同じ8月6日、各国

## 切実な思い 連帯の要に



約60カ国で共同行動を繰り広げた「平和の波」運動。約300人が「原爆を許すまじ」を合唱した(1989年8月、広島市中区の平和記念公園)

語に翻訳されたこの歌が、千人の合同合唱団によって歌われている。その後、原水爆禁止や反核運動が高まることに国内外を問わず取り上げられてきた。

なぜ、これほど広まったのだろうか。メロディーラインの歌いやすさも理由の一つであろうが、核の脅威にさらされたとき、人々は連帯の要であるかのようにこの歌を口ずさんでいる。「三度許すまじ原爆を」。メロディーの頂点と重なるこの言葉に、ただ一つの切実な思いをこめやすかつたのかもしれない。

今では、この歌をかつてほどは耳にすることはない。メロディーが時代に合わないのか、あるいは、歌一つではまともでないほど時代は混迷したのだろうか。  
(広島大特任助教・能登原由美)